
1/100

輪廻

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1 / 100

【Nコード】

N6733Y

【作者名】

輪廻

【あらすじ】

神に選ばれし100人。

全員にある力が授けられた……

主人公について　　ゝ何事も始まるまでのディテールが重要だと考えるゝ

主人公

神道しんどう　幽鬼ゆうき

世界有数の財閥である神道グループ会長の一人息子

身体能力はほぼ皆無。友人に言わせれば本気でチワワと戦っても負けるらしい。

しかし学習面では素晴らしい成績を持ちそれ故か何でも少しでも出来れば応用し神域に達することができる

性格は悪劣非道を極めた者を演じようとしているが、基本的に正義感が溢れている

現在進行形で中2であり勿論中2病気味

ゲームやアニメには全く興味が無く基本的には何時も本を読んでいる

プロローグ 正義とは犠牲と偽善の上に成り立つと思ふ (前書き)

これが第0話になるようなストーリーにする予定

プロローグ ―正義とは犠牲と偽善の上に成り立つとふと思う―

a m 5 : 0 0

「何時も通り変わり映えのしない朝だ。」
そんな事を呟きつつ俺は目覚めた。

a m 6 : 3 0

着替えが終わり朝食も食べ終わった。
俺はテーブルを離れ部屋の外で待っているであろう執事に声をかけた。
「そろそろ時間だ車を出しておけ」

a m 7 : 0 0

俺を乗せたリムジンは問題なく最寄りの駅までたどり着いた。
親父の命令で俺は今、社会活動の学習という名目において登校に電車を使う事を義務づけられている
全く迷惑な事だが親父直々の命令である為断れないのが現実という物である

a m 7 : 3 0

ガキが一人ホームから落ちた
恐らく混雑しているこの駅で群集に押されでもして落ちたのであろう
「俺には関係は無い」
そう言っただけで無視していたがとうとう電車が来てしまったようだ
誰か助けてやれ

a m 7 : 3 1

まずい誰も助けず、誰も気づかず電車の到着を知らせるアナウンスが流れている

「助けなければ」

俺はそう呟いてホームから飛び降りた

a m 7 : 3 2

俺はガキを抱えあげ、ホームに投げあげた

制限、ホームに届いたらしく、上の群集からどよめきが聞こえた
当然であろう

何も居ないはずの線路からガキが飛んできたのだ

驚かない訳が無い

それによるとよめきだろう

俺はそう思った

a m 7 : 3 2 : 3 0

違った

それに気付いた時にはA T Sつまり自動列車停止装置の働いた巨大な鉄の塊があと数c mのところまで来ていた

「これが、これこそが逃れようのな……」

グチャ

そんな音を駅に響かせながら、中2病な台詞を言い終わる前に俺は……

a m 7 : 3 3

俺は馬鹿だった……

あんなガキの為に挽かれるとは挽き肉の様にグチャグチャで真っ赤
な肉塊に成ってしまうとは……
悔やんでも悔やみきれない
だが最期に正義を成せて良かった

プロローグ 正義とは犠牲と偽善の上に成り立つと思ふ (後書き)

神道 幽鬼

DEAD END

第一話　く大体バトルの一話はつまらない（あくまでも個人の感想です）く

短話でちやかちやか進めようと決意しました

第一話　く大体バトルの一話はつまらない（あくまでも個人の感想です）く

？：？？？

「ここはどこだ？」

呟きつつ周りを見れば明らかに異常な空間である

床、天井の差別は無く何も無い

否、一つだけある

微かな光を発しているそれが何かはわからないが確かにある

カツ

光が一際強く輝き気付いた時には目の前に白髪、白眉の老人がいた
老人は言った

「我、神なる者なり」

「は？」

「正義である君に力を与えよう」

「ボケてるのか？お前は誰だ？」

「…空…能力でよいな？」

俺の疑問をよそに強制展開するイベント

質の悪い夢をみているようだ

「っと言うか何重要そうな事小さい声でボソッと言ってんだ空気の
能力つったのか？」

「神よ彼に再び命の炎を灯したまえ」

「お前は神じゃ無いのかよ」

「さあ神道 幽鬼よ蘇れ」

「ちよつ待った説明くれ……」

重苦しい口調を捨ててまで言った願いは通じなかった

第一話　く大体バトルの二話はつまらない（あくまでも個人の感想です）く

神降臨

真偽は不明

第二話　く一難去ってまた一難、最初の一難で死んだら後はないのだろうか？

今話は覚醒

第二話　一難去ってまた一難、最初の一難で死んだら後はないのだろうか？

am7:34

「……ないのかよっ!？」

俺は叫んでいたあの神野郎への最後の言葉の続きを
駅のホームで

「んなバカな」

「何で生きてんだアイツ」

「た、確かにひかれてたのに……」

「キヤー!!!!!!」

様々な声や悲鳴が駅で飛び交う

「つくソあんの神野郎説明もトリックも使わず本人として蘇らせ
やがったな…… お蔭で俺は電車に挽かれても死なない不死身で急に
奇声をあげる狂人のようだな」

言葉の途中で自我を取り戻し口調を治したらしい

(取り敢えずは群集共を鎮めねば)

そう考え

「ワーワー騒ぐな群集共こう言うホームにはな大体逃げ込む為のス
ペースがあるんだよ、俺は其処に間一髪入り込んだ只それだけだ理
解できたか？」

最大限凄んで壮大な誤魔化しの御託を並べ立てた

それは割と効果が合ったようだった

「さあ散れ群集共邪魔だ。俺は上に登る。」

言いつつ上に登ろうとする。

しかし体力が無いので登れない

モタモタしている間に電車の到着を知らせるアナウンスが流れる

「また死ぬ訳にはいか無いな蘇れ無い可能性もある」

眩きつつ冷や汗をかいた

am7:36

電車が駅に到着せんとスピードを緩めつつ停車の体制に入る

「本格的にマズいな」

あと数cmで俺にあの憎き巨大な鉄の塊がぶちあたる

そう思った次の瞬間俺はあの神野郎の台詞を思いだした

「あいつは確かこう言ってたか？『空気の花』って」

刹那フリーフォールなどで感じるあの腹にくる妙な感覚が生じ俺は、
「……俺は今飛んだのか？あの神野郎マジで神だったかこれが『空
気の花』ってヤツか……」

助かった事による安心感と二度の危険による疲労感により俺は意識
を失った

第二話 一難去ってまた一難、最初の一難で死んだら後はないのだろうか？

次話から本題予定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6733y/>

1/100

2011年11月22日05時15分発行